

矢作君へ

佐藤 千春

「佐藤さん、良蔵って名前付けたんだ。いい名前でしょう！」

ご長男がお生まれになったとき、本当に嬉しそうに、そして誇らしげにあなたは語ってくれました。私たちがまだまだ若くて、希望と不安、しかしその不安も打ち消すほどの将来への期待、熱意、そして強い自信とエネルギーに溢れていた時分のことです。

矢作君、あなたと初めてお会いしたのは小泉一郎先生の授業、「米文学特講」でした。この授業は大学院共通科目で、当時大学院生でありながら出来の悪い私は、学部生のあなたの前で、ずいぶんと赤恥をかいたものでした。一方あなたの授業に臨む姿勢、その熱意はそのまま後年のあなたの姿を彷彿させるものでした。小泉先生の情実を許さない、きわめて厳しい視線はあなたに温かく注がれていたことが羨ましかったです。

二人とも指導教授として、小泉先生に師事し、そのお人柄、先生のすべてに触れさせていただいた私たちは、爾来、公私にわたるお付き合いをさせていただきました。学会出張、共同で初めて出した出版物、気心の知れた者同士での宴、いまでもよく覚えております。私たちは今日に至るまで、とても長いお付き合いをしまりました。

その原点、源流にはつねに小泉一郎先生、そして野町二先生がいらっしやいました。野町先生は、東京大学教授斎藤勇先生の愛弟子で、文学博士号を与えられ、私たち学習院大学の学科新設をされた方でした。私が学習院に入学した当時、現在の学科名は「イギリス文学科」という名称でした。私たちはこの両先生のご薫陶をいただき、授業でのその語り口、そのお言葉の一つ一つが胸の中に深く刻まれ、その後私たちの教員生活の中に、ごく自然な形で思い出され、それが口から自然に出てきてお互い往時を懐かしんだものでした。両先生のお話になられる時の癖、表情、その一つ一つさえもが私たちには感動を与えてくださいましたし、幼稚、不謹慎ながらも、それを真似してみることも、ことのほか楽しいことでした。これはかけがいのない二人の共通点、宝物です。

矢作君、あなたとお話していますとほっといたしました。忘れかけていたもの、無くなってしまわないかと恐れていたもの、それがふっと戻ってくるような、温かい気持ちになれました。あなたが何に価値観を置き、次にどのようなことを話すのか、私にはわかりましたし、またそれが何の抵抗もなく私の心には響きました。アメリカ・ルネッサンスの時代、作家について話すと、ことのほか心が震えました。この感激を再び見いだして

くれたのもあなたでした。

「逆縁」という言葉があります。

14年前、私は20歳になった一人息子を失い、その時あなたは悲しんでくださいました。いま私は同じような思いをしています。

中国の古典『列子』に、琴の名手、伯牙が親友の鐘子期が亡くなると琴を壊してしまい、二度と手にすることはなかったという話があります。おそらく私にも、口に出さずとも語り合える友はもういないでしょう。

矢作君が安らかに眠られますことを、そして愛するご家族の方々をいつまでも見守っていてくださることを心からお祈りいたします。

ありがとうございました矢作君....。

(駒澤大学 教授)